

目標があったわけではない。とりあえず、書きたくなって始めた。令和1年11月11日だった。その頃は、梁川高校に勤務していた。毎日書こうと決めていたわけでもない。いつの間にか、そうになっていた。梁川高校を去るときだった。最終号の数字に何か意味をもたせたいと考えたのだろう。タイトルが「燦燦」だから、333号で終わらせた。このとき、自分としては、「校長室だより～燦燦～」の有終の美を飾ったつもりだった。

ところが、野田中学校に赴任すると、次から次へと書きたいことがたまっていった。家にいても、出かけていても、車を運転していても、文章が浮かんできてしまう。もう限界だった。これは、もう書くしかない。何事もなかったように、334号から始めた。きっと、この頃から読んでくださるようになった方が多いのではなかろうか。

相変わらず、目標もなく、日々書き続けた。「千日苦行」という言葉がある。私の場合は、“千日楽行”のようなものである。楽しいのである。苦しければ、続かないだろう。今年度になり、5月頃だっただろうか。初めて3月までの発行計画を立ててみた。このままのペースでいくと、3月下旬には、実に中途半端な数字で終わってしまう。そこで、考えた。どうせならば、1000号にするか。そのためには、土曜日も日曜日も出さなければならない。ペースが上がった。ハードルが高くなった。

平日の夜や土曜日に書くことが多い。波に乗って、一気に3号分つくってしまうことがある。だが、そこでパタッと終わる。私の場合は、どうも1日に3作品が限界のようである。なぜ、平日の夜や土曜日なのか。家人がいないのである。職場で仕事をしている。ある見方をすれば、この「校長室だより～燦燦～」は、家人の労働の賜物として出来上がったものと言える。たぶん、家に家人がいれば、文章を書いたりしてはしていない。物事は、何がどう展開するか、わからない。

本日、どうにかこうにか、目標の1000号に到達できた。ふと、「千里の道も一歩から」という言葉が浮かんだ。1000号が大事だとすれば、日々の1号1号が小事である。その積み重ねによって、ここまでたどり着いた。100号でも、十分意味のある数字である。それが、1000号となると、だいぶ先にあり、届きそうにもない数字に思える。我が60年の人生の中では、実に大きな取組となった。だからといって、特別な感慨があるわけではない。やり切った感があるわけでもない。たぶん、自分にとっては、通過点の一つでしかないのだろう。とはいえ、一つの区切りであることには間違いない。

ただし、これが本業ではない。趣味でもないのだが、ちょっとした時間を使った実に地味な営みである。幸いだったことは、読んでくださる多くの読者の存在があったことである。文章には、読んでもらう相手が必要である。相手すなわち読者の皆様には、直接お会いして感謝の言葉を伝えたいところだが、この紙面にてご容赦願いたい。皆様の日々の生活が、そして人生が、“燦燦”と輝くものになりますよう願っています。